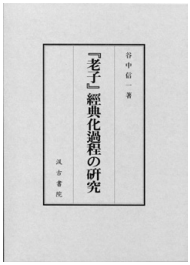
進化する『老子』

有馬　卓也

谷中信一著
『老子』経典化過程の研究



A5判　334頁
汲古書院
［本体9000円＋税］

本書は谷中信一氏（日本女子大学教授）が、ここ数年手がけておられた道家系出土資料研究の結晶である。点在する出土資料の中の『老子』とそれに関連する資料（即ち郭店の楚簡『老子』甲乙丙三種、馬王堆の帛書『老子』甲乙二種、北京大の漢簡『老子』、及び郭店の『太一生水』、上海博物館の楚簡『凡物流形』『恒先』）に伝世文献の『老子』『荘子』『呂氏春秋』『淮南子』などを傍証資料として加え、これらを『老子』経典化というベクトルの上に配置し、現行本『老子』の思想がいかなる経緯で現在の状況に至ったのかを明らかにしようという試みである。

目次は以下の通り。

序
第一章　郭店楚簡『老子』考
第二章　郭店楚簡『太一生水』考
第三章　上博楚簡（七）『凡物流形』考
第四章　上博楚簡（三）『恒先』考
第五章　『荘子』天下篇考
第六章　いわゆる黄帝言考
第七章　『淮南子』道応訓所引『老子』考
第八章　『史記』老子伝に隠された真実
第九章　北大漢簡『老子』の学術価値――「執一」概念を中心に
終章
注・あとがき・索引

これを御覧いただければ、出土資料からのアプローチを一章から四章及び九章に、伝世文献からのアプローチを五章から八章に配置して、実にバランスよく目配せが為されている

ことがおわかりいただけるだろう。このことから、『老子』研究における長年の懸案が出土資料が発見されることによって、どの問題が解明され、どの問題が変質し、さらにどのような問題が新たに生まれたのかがわかる。

※

出土資料の個別研究は数多いが、これを『老子』経典化という視点で体系的に配列し、これまで見えていなかった『老子』思想研究上の問題に一石を投じた所に本研究の価値がある。

周知のように、出土資料の一つ一つが前提として多様な問題（成立年代の問題や、各簡の配列の問題など）をはらんでおり、谷中氏も丁寧に論じておられるが、これらを一つ一つ紹介するのは紙幅の都合もあるので割愛させていただき、本書評では本書のメインテーマである『老子』経典化に論点をしぼって筆を進めていくことにしたい。

さて、そもそも何を以て経典というのか。どの状態に至った時点で経典化したと言えるのか。本書の言う経典化は、たとえば『易』や『詩』が十翼や大序・小序の付加によって経典化されたなどととという場合とは異なる。

氏は終章の第一節「「経」とは何か」において、平岡武夫氏の『経書の成立』（全国書房、一九四六、後に創文社より復刊）の「経」解釈に言及し、同氏の「「経」とは「百代に通行すべき天地間の常道」「それは「形而上的な」性格を持つもの」といった主張を援用しつつ、本書のねらいを以下のように述べておられる。

われわれがここに探究するのは、まさしくそうした意味における『老子』の「経」典化である。『老子』がどのような過程を経て「経」典となっていったのか、言い換えれば、どのようにして「天地間の常道」とも、「恒常の道」とも、「恒久の至道」とも称し得る内実を備えるに至ったのかである。（二二一頁）

氏が「道の哲学の完成」（二一八頁）という意味での経典化のベクトルをもって『老子』にアプローチしたのは、現行本『老子』には見えて、楚簡『老子』には見えないものに注目したことによる。氏も

楚簡『老子』に何が書かれていないか（一一頁）

と述べておられる。楚簡『老子』に存在しなかったもの、即ち氏が本書の中で特に取り上げる「道」「水」「一」などの要素が、どういう経過を経て付加され或いは変容されていき、そして現行本『老子』へと結実していったのか。本書が明らかにせんとする所はここにある。具体的には、楚簡『老子』と現行本『老子』との間に『太一生水』『凡物流形』『恒先』の諸篇を置き、そこに道の哲学が進化する様を顕在化させよ

うという試みである。

そして、全体的な思想の動向として

『老子』が先行して黄老思想の形成発展に一方的に影響を与えてきたのではなく、実は相互に影響しあって、一方で黄老思想が形成され、また一方で『老子』が今本の体裁に形成されていったと考えられる（五五頁）

と述べておられるのは卓見であろう。

本書の試みは十分に果たされ、読者を納得させる論理性も兼ね備えていると言えよう。

※

しかし、『老子』は本書で谷中氏が提示したものとは別な意味の経典化の道もたどっている。『漢書』芸文志には道家系著作のいくつかに「経」字が付されている（老子鄰氏経伝・老子傅氏経説・老子徐氏経説・黄帝四経など）。このことについては、氏も終章の「はじめに」において言及しておられる（二二八頁）が、ここに見える「経」を、先の「形而上的な」性格を持つ「天地間の常道」としての「経」と同定してよいかは再考の余地があろう。

前漢初期、黄老思想が時代思潮であった時に、上記の意味での『老子』は経典化されたと推測される。氏も『老子』経典化の最終段階を前漢文景帝期と位置づけておられる（一六六頁）。この状況と本書でいう所の経典化とは、どう連動するのであろうか。

また、『老子』経典化の問題は、楠山春樹先生のライフワークでもあった老子伝説の形成の中の孔子問礼説話（「『礼記』曾子問篇に見える老聃について」（池田末利博士古希記念『東洋学論集』池田末利博士古希記念事業会、一九八〇）、「呂氏春秋における「老子」と老聃」（沼尻博士退休記念『中国学論集』汲古書院、一九九〇）、「『史記』老子伝の形成―後半部を中心として―」（『栗原圭介博士頌寿記念　東洋学論集』汲古書院、一九九五）など）と決して無関係ではあるまい。というのも、『老子』を経典として奉じた思想集団こそが、老子伝説を形成したと思われるからに他ならない。楠山門下の高弟である氏の考え・見通しを聞きたい所である。

『老子』を経典とした思想集団は、先行する道家系文献（本書で取り上げたもの）が何を残し、何を切り捨て、何が増幅され、何が縮小されたか。そこを体系的に明らかにするのが今後の氏の課題であろう。

※

最後に筆者（有馬）の専門とする所から、二三考える所を述べておきたい。前漢初期に『荘子』の黄老的解釈があったと筆者は見ており、氏の『淮南子』道応訓を「老子が黄帝か

ら切り離されて荘子に接近していく過程」（一六八頁）を示すものとして位置づけ、さらに『淮南子』を

「黄老」道家の立場から編纂されたのではないとするのが本章の結論である。（一九一頁）

とされる見方については、筆者は躊躇する。これは、『淮南子』と『荘子』の関係については、まだまだ検討すべき問題が山積しており、結論を急ぐべきではないのではないかと考えるからに他ならない。

字数も残り少ないので多くは語れないが、たとえば筆者は現行本『荘子』の中に『淮南子』の執筆者の加筆の可能性もあるのではないかと考えている。また淮南王劉安の下で書かれた『荘子要略』『荘子后解』などの著作もある（楠山春樹氏に「淮南王荘子要略・荘子后解考」（フィロソフィア三八、一九六〇）がある）。さらに『淮南子』道応訓の中には、『荘子』に見える説話を『老子』を以て解釈する一条（三九）もある。

以上の『荘子』『淮南子』も含んだ上での黄老思想解釈の問題は、氏のみならず、筆者自身にとっての今後の課題でもある。

（ありま・たくや　広島大学）

◉対話のなかに紡がれた、これぞ人間愛！

完訳 論語

井波律子 訳

のびやかにして剛毅、おおらかな楽観主義と健やかさに満ちた人間・孔子。その力強い「肯定の思想」とは？　今こそ新鮮な大古典の魅力！　四六判 本体2800円

蚕食鯨呑（さんしょくげいどん）

世界はおいしい「さしすせそ」

楊 逸

日本、中国、そして世界各地の食を、歴史や文化といったスパイスを加えて軽妙なタッチで綴るエッセイ。　四六判 本体1800円

岩波書店

（定価は表示価格+税）

東京都千代田区一ツ橋2-5-5

http://www.iwanami.co.jp/